

ケアリング・エコノミーズ序説 ——ポスト資本主義フェミニスト政治生態学の分析的戦略

佐藤千寿（ワーゲニンゲン大学、オランダ）

（翻訳：岩島 史（京都大学））

要 旨

本稿は、日本のフェミニスト政治経済学者が人と自然の結びつきを、いかに自らの実践と結びつけるかを考える日本フェミニスト経済学会の2024年大会共通論題「フェミニスト経済学とエコロジー」での報告に基づく。本稿では、分析視角をシフトさせる2つの戦略、1) 資本中心主義経済からダイバース・エコノミーズへ、そして2) 人間中心主義経済からマルチスピーシーズ・エコノミーズへ、を提示する。これらの分析的戦略は、私達を育む関係者、もの、場所と私達とのつながりを探索することに好奇心を持ち、私達の分析を通して人と人以上のものたち（more-than-human、モア・ザン・ヒューマン）の双方を気かけ、共存するために協力し合う倫理的な主体（subjectivity）を育むことを目指している。ポスト資本主義フェミニスト政治生態学の洞察に基づき、すでにフェミニスト政治経済学者に馴染みのある社会的再生産や労働、生計、交差性といった用語をもとに、議論を組み立てた。この議論は、これらの戦略を省察性（reflexivity）、私達他者たち双方の脆弱性（vulnerability）に感化されるようになることを学ぶこと、ケアリング・エコノミーズを作り出そうとする主体を促すような物語を語ることを学ぶことと組み合わせることの重要性を指摘する。

キーワード

ケア、フェミニスト政治生態学、ダイバース・エコノミーズ、
マルチスピーシーズ・エコノミーズ

はじめに

西日本で育った私にとって桜の花を愛でるように社会化されたことは、全く驚くことではない。桜の花は、本当に春がやってきたのだという環境・文化的指標であり、海外に30年近く住むようになってからも、私はふだん、それを喜びを持って迎えていた。し

かし、2024 年、私は人生で初めて、桜の花を警告として経験した。オランダの私の近所では、桜は 3 月下旬から 4 月中旬のどこかで咲き始めていた。しかし今年は、3 月中旬に花が咲き、3 月末までには花びらが落ちたことに気づいた。オランダの多くの人にとって春の指標であり、通常は 5 月中旬すぎまで咲くチューリップが 4 月末までに花びらを落としているのを見たときにも、この警告はより強く感じられた。さらに、東京で日本フェミニスト経済学会の大会が開かれる前の月である 2024 年 6 月に、オランダの記録史上最高の月平均気温が記録された。7 月から 8 月にかけての短い日本訪問の間、私が経験したのは、私が 90 年代後半に日本を離れる頃には当たり前だった 30 度を超える「真夏日」ではなく、新たな当たり前になった 35 度を超える「猛暑日」だった。気候変動の極端な影響を経験しないにしても、私達の日常生活で変化は観察可能である。地球温暖化で、私達の選択は世界を変化させ、その負荷は公平に共有されていない。猛暑日にエアコンのきいた部屋にいられるような特権を享受している私達が、私達の日常の福利(well-being)を作り出すための社会的また環境的代価を強いられている福島、水俣、沖縄や北海道を含む遠くの犠牲地区に、どのように関心を向ける(care about)ことができるだろうか。そして、地球上の人以上の他者たち(earth others)についてはどうだろう？ クマゼミがこの数十年で日本の南部から東北部に広がり、より多くの生存スペースを獲得したとして、他の無数の地球上他者たちは日本のこの酷暑と長引く夏の日にどのように対処しているだろうか。ケアする経済(an economy that is caring)について考えるとき、私達はどのように経済を、私達の無関心と気候変動に苦しむものたち(人々以上の地球上他者の両方)への関心を支えるかたちで、理解することができるだろうか。

食は、私達と遠くの人びと、そして地球上他者たちとの相互依存を考える一つの方法である。日本語を含む多くの言語で、私達は食べたものによってできていることを示すことわざがある。環境と気候変動のフェミニスト社会学者であり、このことわざと商品フェティシズム(commodity fetishism)を接続させ、商品化の影響の分析的戦略を提案したマーサ・マクマホンを引用する。

農業と食の商品化への抵抗は、食を単に食べるものとしてではなく、関係性の具現化(embodiment)と捉えることを必要とする。じゃがいもは、ただのじゃがいもではなく、その内部にそしてそれを食べた私達の内部に、じゃがいもを育て、収穫し、交易した人びとの社会関係や、自然、それは抽象的なものではなく、ある特定の間人以外の他者たち、もの、個々の場所といったものとの関係性を持ち込むものである。食べる時、私達はこれらの関係性を消費する(McMahon, 2002, p.204)。

人間の労働の創造性と、その労働の創造性と自然、およびそれらの関係性の中での複雑な相互作用、そしていかにその複雑さが商品化の影響として不可視化されるかを指摘したマルクス(1992)を踏まえ、マクマホン¹⁾は、食べるということは、それを生産し、収穫し、交易した人びと、地球上他者たち、もの、場所といった複雑な社会生態的(socio-ecological)関係を私達の中に招き入れることであると想像させる。それは、私達が食べるときには、食べ物を育んだ土のような、人以上のものたちをとりまく社会生態的關係も取り込んでいることを想像させる。単に土と言っても、それは多様な虫や微生物のような多数の種から成る。そして空気。私達が呼吸する酸素は、藻類や植物が、私達が吐き出した二酸化炭素などを地質学的な時間枠で変化させて作り出したものである。私達は、猛暑日が私達の食べる食料作物や他の種たちにどのような影響を及ぼしているか、関心を向けているだろうか？ 私達は、自分たちの消費する食料作物、水、空気、労働がどこから来たのか、それらが私達の一部になる前後にどのような関係を経ているか知っているだろうか？ 食料作物、土壌、植物、そしてそれらを形成する多様な社会生態的關係の網は、気候変動にどのように対処しているのだろうか？ 日本の人々と日本経済は、必要なエネルギーの90%近くが外部から供給されている状態で(2022年の世界で第5位のエネルギー消費国である)、エアコンや原子力発電なしに変化する気候に対処することができるだろうか(ANRE, 2022)？ 旱魃や不作のような自然災害や人災の連続の中で、人々や地球上の人以上の他者たち(earth others)がどのように福利(well-being)を維持しているか、関心を向けているだろうか？ 自らを合理的で独立したものとみなすように社会化を通して学んだとしても、私達の身体は空気、食べもの、水や、そしてそれらに付随する社会生態的關係の網、さらには何兆もの細菌種からできており、絶え間なく共に変化している。私達は他の種や生命世界(lifeworlds)と分離していると考えることができるか。私達の日常生活の内に、相互依存し絶え間なく共に変化する関係性を経験せずにいられるのか。

マルクスが指摘し、続いてマクマホンが繰り返したように、私達の福利に貢献するのは、複雑な社会生態的關係の網の目である。もし食料や労働、その他の必要不可欠なものが商品化されれば、それらの生産、流通、消費に埋め込まれた、私達の生を支える人と人以上の種たち、もの、場所との関係をさらに不可視化することになる。特定の認識論的・存在論的仮定によって形成され、無意識の特権と商品フェティシズムによって支えられるこの盲目は、私達がこれらの私達の福利を育み、私達の福利となるものたちを無視し、関心を向けないための目に見えない状況を提供する。日本で政治経済学

を研究するフェミニスト研究者である私達は、犠牲を強いられる地域に住む人びとだけでなく、数では人口を大きく上回る地球上他者たちを含むマイノリティ化された声を聞くことができるような倫理的な主体 (subjectivity) をどのように育むことができるだろうか。どのように私達は、私達とかれらのニーズを満たす経済に私達もかれらも携わるような状況を作り出すことをより支えるために、かれらの無償または十分に払われていない労働や、満たされていないニーズを認識することができるだろうか。もし私達が、分析を自然との相互依存する関係から分離してしまえば、私達は自らの共-生存を脅かす社会的な不平等と環境侵食を悪化させる危険性がある。

念のために言及するが、私は人同士や人と地球上他者たちとの間の「抑圧のオリンピック」(石原、下地、2022、p.36)に参加することを提案しているのではない。私が懸念しているのは、誰がより抑圧されていてよりケアを必要としているのかを特定することではない。私は、フェミニスト人類学者で先住民族アイヌを研究する石原真衣と、社会学者で戦後の混血児を研究する下地ローレンス吉孝が、特権に盲目な人びとやマイノリティの部分的な実態を省察性なしに表象する人びとの間で、かれらが強いるマイノリティ化させられた人びとの感情的代価、それに私は環境的代価も加えるが、を伴うケアや不払い労働を制止するために、ノイズを鳴らし続けることの重要性を論じていること(同上)を支持する。私は日本の政治経済学の論争や生態経済学については少ししか知らない。ケアリング・エコノミーズについても何を意味しうるのかを探索し始めた段階である。私の研究は経済的な可能性を探り、実験するという精神に基づくものだ。ポスト資本主義フェミニスト地理学者のJ. K. ギブソン-グラハム(2006)やかれらの経済的試みを模索するコミュニティ・エコノミーズの研究者(Gibson-Graham et al., 2013; Roelvink & Gibson-Graham, 2009)が提起しているように、私はかれらに倣い好奇心のメガネをかけて経済の違いを読む。私は、ポスト資本主義フェミニスト政治生態学に影響を受けた本稿を、日本の特権を享受しているフェミニスト政治経済学者の間でノイズを鳴らしている人びとに加わり、経済をよりケアリングで(caring)、不可視化されているが私達すべてが依存する、私達を構成する相互依存の網をなす人びとや地球上他者たちによって提供されるケアにより関心を向けていこうとする主体を促すために共有する。

ケアとニーズに基づく経済

経済をもっとケアリングなもの(caring)にする変化を提案するために、哲学者ベレニス・フィッシャー(Bernice Fisher)と政治理論家のジョアン・トロント(Joan Tronto)によってまず統合され(Tronto, 1990, 1993)、トロント(2013)によってさらに練り上げ

られたケアの概念から始めたい。この発展中のケアの理解は、しばしば西洋のフェミニストのケア倫理の議論で参照され、2024 年には日本語訳もされた。フィッシャーとトロントはケアを「私達が私達の『世界』なかで可能な限りより善く生きるために、この世界を維持し、継続し、修復するために種が行うすべての活動」と定義している。ここで「私達の世界」が意味するのは、私達の身体、私達自身、そしてその環境である (Tronto, 1990, p.40)。かれらの概念化はケアを人の生を中心に置き、基本的なニーズの一部と見ている (根底にある存在論的前提)。人の本質を関係的で相互依存するものと認識することで、人全体に共通するものは、すべての人がケアを受ける必要があるということが理解される。かれらの概念化はさらに詳細に検討され、5つの側面に分けられた (Tronto, 1993; Tronto, 2013)。まず、ケアは私達の世界を維持し、継続させ、修復する必要に関心をもつ種を必要とする。つまり、「関心を向ける」ことは、それぞれの世界において満たされていないニーズを認め、対処する意思と能力をもつ主体 (subjectivity) を必要とする。ニーズが認められると、ケアは責任ある主体 (subject) を要求する。つまり、特定された満たされていないケアを、それらのニーズを満たすための戦略を考えだし行動することを重んじる主体である。ケアの概念化はこれだけにとどまらない。ケアは直接ケアの提供に関わる人びとが適切なケアを行う能力を持っていることを保証する主体も含む。この、ケアを提供することは、ケアを受け取ることと一式である必要がある。つまり、ケアを受けとった人がその反応を共有するために、与えられたケアの有効性を保証する主体である。最後に、ケアには、すべての過程 (ニーズの特定、戦略の立案、ケア提供とケア受取) が、多元性、コミュニケーション、信頼、尊重、連帯などの合意された価値観に従って行われるように、ケアの過程に関わるすべての関係者、もの、場所とともにケアすること (caring with) を保証する主体が必要である。この最後の側面は、トロント (2013) によって追加されたもので、私達が救世主義 (saviourism)、つまり他者を救うという条件で私達の意味を押し付ける状態から離れ、ケアを受け取る側とのより民主的で互恵的な関係性を育む方向に私達を向かわせるよう、もっと注意を払うよう、私達に重大な注意喚起をするものである。

種の相互依存性と基本的ニーズを共同のもの (collective) として満たすことを中心におくケアの概念化は、フェミニスト的であるだけではないと私は考える。カール・マルクスが 1875 年に著した『ゴータ綱領批判』(1994) に書かれた有名なスローガンである「能力に応じて働き、必要に応じて受け取る」(“Jeder nach seinen Fähigkeiten, jedem nach seinen Bedürfnissen!”) に表現されるマルクス主義倫理とも共鳴している。これは、それぞれが、それぞれに独自の能力に応じて労働する経済と、その経済から生成さ

れた共同体（コミュニティ）が、その成員から集められた剰余をどのように分配するかを民主的に決定することを通じて、満たされていないニーズを確実に満たすよう集団的に対処し責任を持つことによって、共同体を形成していくことを論じている。誰のニーズも満たされずに放置されるべきではない。ニーズを確実に満たすものとしてのケアは、経済と、剰余、すなわち資源／富、をそのために生産し分配する経済活動を行う主体を必要とする。その点で、マルクス主義の視角は特に、資本主義を生産的でケアは再生産であると並列するのではなく、ケアを多様なクラス（class）とクラス以外の過程で操作されているものとみなす人びとにとって、有用である。マルクスによる5つの生産様式に従い、ポスト構造主義マルクス主義派のレズニックとウォルフ（Resnick and Wolff, 1989）とレズニック、ウォルフ、ギブソン-グラハム（Resnick, Wolff and Gibson-Graham, 2000, 2001）は、クラスを剰余の生産、充当と分配のプロセス（クラスプロセス）として見ており、5つの異なるクラスプロセスが拮抗し動的な多様で複数の経済、ダイバース・エコノミーズ、を生み出しているものと捉える。このような包括的なポスト資本主義 マルクス主義⁽¹⁾の視角は、後述するように、生産的な資本主義と再生産的なケアを二項対立に限らないケアリング・エコノミーズ（caring economies：多様なケアする経済）の概念化によって、多くの示唆をもたらす。

フェミニスト政治生態学は、人と環境の関係を、フェミニストの視角から分析する。フィッシャーとトロント、またマルクスによって概念化されたケア倫理は、しばしば人間中心的な活動として参照される。オーストラリアの環境哲学者であるヴァル・プラムウッド（Val Plumwood）や、『ケアについて』（Matters of Care）の著者であるマリア・プイグ・デ・ラ・ベラカーサ（Maria Puig de La Bellacasa）のように、人と環境の関係の検討のなかからケアを理論化することは、一方で、人と地球上他者たちの相互依存関係によって行われるポスト人間主義的な多種（multispecies）、もしくは異種間（interspecies）のケア（以降、マルチスピーシーズ・ケア）を探求する助けとなる。マルチスピーシーズ・ケアによって、私達は地球上他者の担う力（agency）を見ることができる。例えば、プイグ・デ・ラ・ベラカーサ（2017）は土を回復するために、いかに異なる種たちが協働しているかを述べている。それは、人だけでなく地球上他者がケアの主体であることを私達に認識させる。これは、地球上他者たちがケアの提供者で、人類がそのケアの受け取り手であるという認識に基づく。この認識は、私達が、種間の相互依存を維持するために地球上他者たちのニーズを満たそうと画策する動機付けになるかもしれない。プラムウッド（Plumwood, 2008）は私達の場合、私達の福利を支える社会生態学的関係性を通して作られていると認識することを提案している。この理解からは、過疎化が急速

に進行する農村地域の外で、食料自給率が40%を切る日本(MAFF, 2023)で生活することは、私達がケアを確保する場合は、例えばとうもろこし、大豆、小麦、牛肉、野菜、果物が米国、ブラジル、カナダ、オーストラリア、中国やASEAN諸国から来ているように、世界中に拡散しているということである(MAFF, 2022)。プラムウッドは、前述したマクマホンと同様、商品化体制を批判し、商品化の影響を、「私達を育て、私達の営みを支える地球の部分」を不可視化するものと述べている(Plumwood, 2008)。もし私達が私達の生を支える世界をケア(維持し、修復し、継続)していくのなら、人間中心のケアとマルチスピーシーズ・ケアを合わせることで人と、人以上の生命世界のニーズに注意を促し、文字通り私達になるものたちを想像し、責任をもち、ケアができる。

ケアリング・エコノミーズは、人と人以上の生命世界が共に生き延びるために、それぞれのニーズを満たし、それぞれの福利を可能な限り善く達成するために、人と人以上の生命世界がそれぞれの身体、それぞれ自身、そしてそれぞれの環境を維持し、継続させ、修復することを可能にする資本主義以上(more-than-capitalist)でマルチスピーシーズな経済であると暫定的に定義する。トロントの『ケアリング・デモクラシー』(2013 = 2024)とポスト資本主義マルクス主義の包括的なダイバース・エコノミーズおよびマルチスピーシーズの考え方の双方の核心にならない、私はこれをケアリング・エコノミーズ(caring economies)と呼ぶ。ケアリング・エコノミーズは、その本質からして、私達自身、私達の福利、そして人と地球上他者たちとの社会生態的関係をつくりだす関係者、もの、場所のニーズを見出だし、重んじ、関心を向けることを私達に促す。かれらのニーズを知ろうとする私達の関心が醸成されていなければ、かれらを理解することも、まして注意を払うことも、かれらと私達の満たされていないニーズを満たす戦略を思いつき、責任をもつこともできない。気候変動と環境破壊は、植民地主義と資本主義経済のみによってもたらされるのではなく、私達の無関心と相互依存を認識できないことにもよるものでもある。もし政治経済を研究する日本にいるフェミニストが人の経済と自然の生命世界の相互依存関係を探索することに関心があるのならば、最初の一步は、私達を育み、私達になる場、もの、関係者と私達との関係性を探索することに好奇心をもち、理解することを可能にする倫理的主体(subjectivity)を育むことだろう。そうすることによって、私達はともに生き延びるために、お互いに関心を向けることができる。

ケアリング・エコノミーズに向けて

——ポスト資本主義フェミニスト政治生態学の分析的戦略

この予備的な探求のために、私は2つのポスト資本主義フェミニスト政治生態学視点

からの分析的戦略を提案したい。

戦略1：資本中心主義経済からダイバース・エコノミーズへ

人と生命世界の共存への関心を募らせているポスト資本主義・マルクス主義者かつフェミニストとして、私は広範に蔓延るケアを再生産的で女性的とみなし、男性的とみられる生産労働に従属する対になるものとする傾向に抵抗感がある。マルクス主義の視角からは、生産労働は剰余を生み出すものである。剰余とは、労働者の基本的なニーズを満たすために必要な労働以上の労働であり、労働者の、すなわちかれらの身体、かれら自身、そしてそれらを取り巻く環境の場（コミュニティ）の満たされていないニーズを満たすために使われるものである。剰余によって可能になったケアは、この世界が再生産される社会的過程の一部としばしば考えられる。この論旨では、社会的再生産の一部としてのケアは、生産労働をすることも含む、現在進行形の人の生きる能力（capacity）の生産を可能にするものである。ケアはめったにそれ自体が生産的だと考えられることはない。典型的にケアに分類されるような活動、例えば、料理、人のケア、コミュニティでのボランティアは、無償の、もしくは十分に支払われていない労働で、市場で交換されないことが多く、かつ女性やマイノリティによって担われている。このフェミニストが何度も分析の俎上に上げてきた、「生産的なので有償でだからより価値がある」対「無償なので生産的ではなくだから価値が劣る」という階層的な見方は、知らず知らずのうちに有償労働を特権化する男性中心で資本中心のイデオロギーによってかたちづけられている。この二項対立を問題化しないフェミニスト分析は、この二項対立を再生産するおそれがある。同様に問題なのは、この有償労働はしばしば、無言の前提として資本主義の賃労働を前提としており、これは社会的再生産としてのケアと相対的に対になるものとして構築されている。この多様なクラスプロセス（剰余を生産、充当、分配する労働過程）に盲目的な分析に起因するめったにはっきりとは述べられない前提は、最も残念なことに資本主義が覇権を繁栄する状況を提供するが、それはケアの意味を示し直す場を作るために、再考されねばならない。

資本主義の覇権に異議を唱えるうえで、有効だとわかっている一つの方法は、資本主義を経済的思考の中心におくことを自然化する経済本質主義の影響を理解し報告することである。このような経済的思考を二人のマルクス主義フェミニスト人文地理学者のペンネームであるギブソン-グラハムは資本中心主義（capitalocentrism）と呼んでいる。この資本中心主義の視点を通してみるとすべての経済的实践は、以下のように見える。

根本的に資本主義と同じ（もしくはそれを真似てつくられていて）、もしくは資本主義の不十分だったり質の悪い模造品であるか、資本主義の反対であるか、資本主義を補うものであるか、資本主義の空間かその軌道の中にあるもの（Gibson-Graham, 1996, p.6）。

ギブソン-グラハムの資本中心主義経済本質主義への批判は、クイア文学批判のイヴ・セジウィック（Eve Sedgwick）が「クリスマス効果」と呼ぶもの（Sedgwick, 1993）に着想を得ている。セジウィックによると、クリスマスが近づくと、私達の日常生活の中で話題や広告はクリスマス関連のものが急増し、クリスマスが近づくに連れさらに増えていき、まさにこの注目の高まりが、クリスマスの中心性を標準化し、さらに高めている。セジウィックはこれと同じ自己強化的な焦点を、学術的な実践も含む私達の日常生活のなかで繰り返されるパフォーマティブな異性愛規範を表現する実践にも見出している。セジウィックの洞察を応用し、ギブソン-グラハムの資本中心主義は、資本主義を私達の経済的思考と実践の自然な中心に置き続ける、何度も繰り返すパフォーマティブな表現の実践を私達が理解することを可能にし、ついでそれを省みるよう促す。例えば、資本中心主義視点を通してみると、経済を測るのに GDP を用いることにはなんの問題もないし、社会を「資本主義的」と呼ぶことも、それが資本主義的ではない無償のケアやその他の労働を見えなくしているにも関わらず、奇異とは捉えない。資本中心主義は、資本家や資本主義企業の成功を称える文化的表現の標準化にも見られる。資本中心主義はまた、人びとに資本主義企業で働きたいと思わせるが、そこでは人びとは自らの労働の成果（剰余）の運用について発言権を持たない。ギブソン-グラハムは、私達が研究者として書き、教えるとき、ケアと／または社会的再生産（の家事労働など）をどのように表現しているか、私達に問いかけている。クラスプロセスとして捉えているのか？ そもそも労働と認識しているのか？ もしそうであれば、資本主義賃労働と比べて、その労働はいかに資本制クラスプロセスと区別されている（いない）のか？

マルクスが（原始）共同制、個人独立制、奴隷制、封建制、資本制という5つの基本的な生産様式を特定したとしても、史的唯物論は、それぞれの歴史的時代において1つの生産様式が支配的になると説いてきた。クラスプロセスに無関心なほかの経済思想の学派とともに、この正統派マルクス主義の前提は、資本主義的で、資本主義企業、資本主義労働、資本主義取引、そして資本主義金融を含む資本制クラスプロセスと多様な非資本制クラスプロセスの相互依存に盲目したうえで、資本主義に焦点を当てさせる。資本中心主義と多様なクラスプロセスへの盲目が合わさると、非資本制クラスプロ

セスで成り立つ（女性を含む）マイノリティと地球上他者たちによる経済的貢献を不可視化する。多様な取引（例えば非市場またはオルタナティブな市場での取引）、多様な労働（例えば無償、年季奉公、奴隷また共同制の労働）、そして多様な金融（例えば非公式な融資）を通じた私達の世界を維持するための貢献は、資本主義であると認識されるときのみ、可視化される。これらの経済活動は資本主義が設定した条件で測定される場合、それは通常、現金で測定される（より多く支払われるほど、価値がある）。このことが、人や地球上他者たちによって行われる数値化できないケア労働のような多くの貢献を不可視化している。資本中心主義の視角からは、これらの人びとと生命世界のニーズを満たすための健全な戦略とは、かれらの貢献を計算し、有償化することだろう。これはかれらの活動を、資本主義の論理が支配する階層的に設定された経済世界に位置づけることにもなる。研究が示すように、気候変動の影響は、マイノリティ化された人びとと地球上他者たちにより深刻にあらわれるが、特権を享受する人びとよりかれらの賃金は少なく、かれらの負う不均衡な損失は、資本中心主義的な用語でいうと、あまり重要と見做されない。特権をもつ人々が相互依存的に結びついているものたちへの無関心を自然化した植民地主義、資本主義やその他の枠組みの中で、賢明であると考えられた経済的活動が引き起こした気候変動の時代、（フェミニストの）学者たちにとって、マイノリティ化された人びとや地球上他者たちのニーズに関心を持ち、それに配慮することは喫緊の課題である。

資本中心主義から距離をとるためには、資本主義の中心性を確保する儀式的で自然化された資本中心主義のパフォーマティブな行動から離れ、その代わりに人びとと、私達が相互依存している多様な地球上他者たちをより善くケアし、より善くともに生き残るための条件を提供するパフォーマティブな行動を選択する必要がある。ギブソン-グラハムとフェミニスト政治生態学に基づき、私はマイノリティ化された人びとと地球上他者たちによって産み出す多様な経済が、それぞれの生活／生命のなかで私達を育てている経済といかに相互作用しているかを知ることを提案する。1990年代以降、欧米をはじめとするフェミニスト学者たちは、女性たちの間の差異を認識し、より公正な変革をもたらす研究対象の内部の差異に敏感な交差的な分析を行うことを批判的に学んできた。女性が多様であることを自然化させるためのこのようなフェミニストたちの一致協力した努力のおかげで、女性をすべて同等のものと見る見方はより優勢ではなくなっている。同様に、社会生態的なケアの関係性を育む好機をつくりだす多くの場を見出すために、資本中心主義に終止符を打ち、経済を異種混交のものと見ることやすべての経済や社会が一枚岩に資本主義であると見ないことを学ぶことが重要である。

フェミニスト政治経済学を研究する者にとって、女性やマイノリティ化された人びとの無償の家事労働やコミュニティのための労働、つまり通常社会的再生産の一部とみなされる労働についての批判的議論は好例である。有償労働が生産性の典型である資本中心主義の視角からは、女性やその他のマイノリティ化された人びとの、他者を気にかける労働はしばしば再生産に分類される。これらの労働は全く支払われていないか、不十分にしか支払われていないため、これらの労働を行う人びとは搾取されているとみなされる。この搾取は、しばしば女性やその他のマイノリティ化された人びとの無償労働に寄生している資本主義と家父長制の交差のためと考えられている。資本中心主義の視角は商品化された労働を自然なものと認識し、価値を市場に基づく交換を通して決定されるものとみなす。この同じ労働を、上述したマルクス主義とフェミニスト視角の組み合わせを通して見るとき、使用価値を生むものと認識される。この労働は、人と人以上の生命世界を維持し、継続させ、修復し、それはこの労働が生産したものを消費する過程において使用価値を生む。マルクス主義の理論において、この労働が剰余を生みだし、剰余を生み出すすべての労働は、その生産物が市場で交換されたり貨幣化されなくても、使用価値があり生産的である。つまり、生産性は貨幣化された交換価値によってではなく、個人のニーズの充足を超える共同のニーズを満たすために使われる剰余の有無によって決定される。とはいえ、労働は無償であろうとそうでなかろうと、マルクス主義の生産性の定義はまさに剰余の生産であるため、剰余を生産しても、私達の共同の世界を維持したり継続させたり修復したりしない労働も生産的であるとみなされる。つまり、剰余を生み出す採掘主義的な工業資本の賃金労働、封建的労働もしくは奴隷労働も、剰余がそれを生産した労働者以外の人が充当采配を決定する限り搾取的 (Resnick & Wolff, 1989)⁽²⁾ でもあるが、生産的である。ここでフェミニストとポスト・ヒューマニストは、ケアにおいてなにが生産的とみなされるかの理解において、主流派マルクス主義から袂を分かち (Barca, 2019; Barca et al., 2023) : 生産的ケアとはわたしたちの世界を維持し、継続させ、修復するために種が行う労働であるとみなすことである。ここでの教訓は、ケアを再生産労働と認識するだけでなく、交換価値の有無に関わらず剰余生産を伴う生産労働とみなすことにある。

上述した洞察は、ケアを意味づけ直す助けとなるが、資本中心主義の視点からは見えないであろうクラスプロセスの多様性については述べていない。そこではクラスプロセスは、剰余の生産、充当、分配の過程と概念化される。ケアが再生産と同一視されるとしても、この労働に特徴的な生産様式はひとつもない。資本中心主義ではなくクラスを識別できる者の視角からは、ケア労働は、有償にしろ無償にしろ、すべてのクラスプロ

セスに見出される。家父長的な階層性が支配する世帯内で、世帯員によって生産された剰余が家長、例えば年長の男性によって充当、分配されるとき、このケア労働は封建制クラスプロセスで行われている。この労働の剰余が階層的な上位者によって充当されることは、家族の義務から生じる権利と義務を相互に受け入れることによって可能になる。家族の外部かつ封建制クラスプロセスのなかで、ケアは、負債に縛り付けられることによってそのサービスが確保される年季奉公の労働者、もしかしたら移民労働者の子守という形態で行われるかもしれない。これは、部屋と食事代で労働の対価が支払われるケア労働者にも適用される。別のクラスプロセスになるが、日本では単身世帯が増加している。その約40%が単身高齢世帯主世帯の増加によってである。この場合、個々の世帯主が自らの剰余を充当し、分配することは個人独立制クラスプロセスと理解することができる。扶養者（例えば子）のいる労働者（例えばひとり親の父または母）が自らの剰余を充当し分配することもまた、個人独立制クラスプロセスである。異性愛関係の妻が自らの剰余を充当し分配すると自分自身と他世帯員に認識され尊重されるときにも、個人独立制クラスプロセスと読み取れる（Cameron, 1996）。ケアはもちろん共同制クラスプロセスにおいて行われることもあり得る。例えば、世帯員は、血の繋がりがあってもそうでない場合も、共同で生産した剰余をどのように分配するか、共同で決定するかもしれない。最後に、もし世帯がケアをサービスとして購入し、資本主義企業に雇われた労働者が賃金をもらって働く場合、商品としてのケアは資本制クラスプロセスで行われている。念の為、世帯のケアニーズを満たすために購入されるサービスとしてのケアも、資本制クラスプロセス以外の多様なクラスプロセスのなかで行われている。購入されるケアが、自営労働者によって担われる場合、個人独立制クラスプロセスでも行われ得るし、年季奉公の労働者によって担われる場合は封建制クラスプロセスで、生産者協同組合の組合員によって担われる場合は共同制クラスプロセスにおいて行われ得る。最後に、もし刑務所や売春宿で起こりえる、個人が、意思に反して所有されケア労働を行うことを強制され、その剰余が所有者によって充当されている場合、このケア労働は奴隷制クラスプロセスにおいて行われているといえる。

前段落では、多様なクラスプロセスの視角から、世帯内で行われるケア労働について述べた。簡潔に述べた例は、主に世帯のケア労働にのみ関連している。この多様なクラスプロセスの視角は、他のケアワーク、例えば性労働（van der Veen, 2001）に適用しても同様に生産的である。私達が資本中心主義と多様なクラスへの盲目から離れることができれば、それぞれのクラスプロセスに独特の状況を見ることが可能になる。この視角のなかで、5つのクラスプロセスのうち、封建制、資本主義制、そして奴隷制クラスプ

ロセスで行われるケアは、定義上、剰余を生産した労働者ではない人が剰余を充当しているので搾取的である。他方で個人独立制、もしくは共同制のクラスプロセスで行われるケアは剰余がそれを生産した労働者によって充当、分配の采配を決定しているので搾取的ではない。マルクス主義の洞察は、私達の日常生活における異なる質の搾取と剰余の扱いに公正なケアを明確にするために役立つ。フェミニスト理論はこの視角を、ケア労働が行われる多様で、矛盾するかもしれない方向に交差する動的な権力を認識するのに役立つ交差性を導入することで研磨してきた（例えば、Nakamura & Sato, 2023; Sato & Soto Alarcón, 2019）。交差性の認識は、資本主義が無償の再生産労働に頼りながら、ケア労働を行う労働者を搾取しているという理解を変革する可能性をもっている。交差性は、ケアを抑制する不公正な作用に加担する条件を排除し、その代わり非搾取的な形態のケア労働を支える条件を育むためのしっかりした戦略を持つてのぞむよう私達に指示する。交差性はまた、ケアを私達の日常の世界の維持、継続、修復を可能にする生産労働であり、その労働者を価値ある担い手（agent）と意味づけ直す助けにもなる。

戦略2：人間中心主義からマルチスピーシーズ・エコノミーズへ

戦略1は資本中心主義とクラスへの盲目が私達の経済的思考にもたらす影響に対して私達を批判的にする。この戦略は、私達にケアを、再生産としてだけでなく生産的と認識させ、ポスト資本主義のダイバース・エコノミーズの視角を発展させることに焦点をあてている。この戦略は、わたしたちが資本中心主義を超えて世界を見るために必要な分析手段を提供し、そのより広げられた視角のなかで、私達の経済の理解をかたちづくる時の資本主義の中心性を減少させる。ポスト資本主義の視角は私達に、前進するための新たな道筋を見つける基盤をつくる方法を装備させる。この道筋とは、私達の共存へのマイノリティ化された人々の貢献を知り、今は不可視化されているものの担う力（agency）を、社会的差異の交差性への意識を保ったまま認識する道筋である。戦略2は人のみの生活世界を超えて考える。この戦略は、私達に、すべての議論で人を中心に置く人間中心主義について問い、考えるよう求める。ケアを種間（interspecies）や多種の（multispecies）の活動と認識させ、マルチスピーシーズの視角を発展させる。ここで使うマルチスピーシーズの視角とは、他の種の視点から世界を見よというものではない。私達の間とは、私達の日々の生活と、人以上の生命世界との相互依存的な関係を育むものであると指摘したブルームウッドは、次のように述べている。

私達人は自然が植民地化され、商品化され、栽培化、家畜化され、私達人のイメージとニーズだけを反映させる鏡にされたときだけでなく、本当に自然のなかに自分自身を認識することができる。寧ろ、私達は無数の形態の自然の他者たち、つまり地球上他者たちのニーズ、目的や動機が私達自身のそれらと同様に認識され、尊重されるなかで私達を認識できるのである (Plumwood, 1993, p.137)。

私達の視角は必然的に私達人のものである。私達を自然の中に認識することで、プラムウッドは、地球上他者のニーズ、目的や動機について学び、私達自身のものを特権化することなく、かれらについて学んだ認識と私達の視角を統合させることを提案している。他方で、他者の無償労働を無視することの否定的な影響を指摘する石原と下地 (2022) のいう「慎重な思考」を適用することで、私達は、地球上他者たちの現実を研究し、表象しようとするときの自らの特権と立場性を反映させることを奨励されている。政治経済学を研究するフェミニストは、過去 30 年の間に、マイノリティ化された女性たちによって行われる社会経済活動の多様性とその社会関係への影響に光をあてる交差的な視角を統合することで、理論的前進を遂げてきた。ただし、この視角はまだしばしば人間中心のである。人類がより善く生き延びるために、人類は無数の形態の地球上他者たちとともにより善く生き延びる必要がある。マクマホンやプラムウッドらが提案するように、ケアは、私達自身を含むすべての生命が、他の生命と相互依存적であると考えることを私達に要求している。私達の人間中心主義がこの相互依存を私達に理解することを可能にしようがそうでなかろうが、それによってもたらされるかれらへの損害は、私達自身の損害である。もし他の生命のニーズが満たされていなければ、私達がかれのニーズに対処し、ともに生き延びるために責任をとることもできないだろう。もっと悪ければ、人が地球上他者を、相互依存関係で共有している世界を共に構築しているのではなく、狭い意味で功利であるとか、搾取できるというように理解する条件をあえて提供し続けるかもしれない。

フェミニストのケア倫理もマルクス主義のそれも、人は相互依存적であるという前提を共有している。この第二の戦略はこの認識を、地球上他者にまでさらに広げるものである。フェミニスト政治経済学者は、人の家族のなかでの相互依存を認識する点では最前線にいるかもしれないが、人と地球上他者との相互依存を認識することはめったにない。ちょうど男性世帯主の世帯を考えることが、以前の学者たちを女性について盲目にしたのと同じように、私達の焦点を、私達が生計をたてている人の経済にのみ絞り、私達の経済を他のものよりも優れているものと考え、もしくは地球上他者からは採取してい

るのみだと考えることは、地球上他者を単なる搾取できる資源とのみ考えること以外のものとして見ることを難しくさせる。私達の視角を人間中心主義からマルチスピーシーズ・エコノミーズに移行することは、新たな分析技術一式の開発を必要とする。女性をすべての異種混交性のなかに見始めた学者たちの研究と並行して、まず 1) 経済(エコノミー)を生態(エコロジー)と考えること、2) 人以上の交差性を発展させること、3) 植民地主義の影響を考慮に入れることを学ぶことによって、私達の見方を人間経済と地球上他者との相互依存の関係へと広げる倫理的主体性を養うことを私は提案する。

ロールヴィンクとギブソン-グラハム (Roelvink and Gibson-Graham, 2009) またギブソン-グラハムとミラー (Gibson-Graham and Miller, 2015) によって論じられ、ミラー (Miller, 2020) によってさらに精緻化された生態生計 (ecological livelihoods) は、私達が経済を生態と、生態を経済と認識し両者は相互依存関係にあると認識することを提案する。私達人間の側から見ると、マルクスは、労働は貴重な生産的資源である自然を人間の筋肉と脳、またフェミニストが追加したように感情を使って変換する人間の創造的な能力であると説いた。この生態生計の視点を通して、非人間の側から見ると、地球上他者は、人が人の経済のなかで果たしている役割と同じように、確かに私達の世界を変換している。このような概念化は、私達が多様な地球上他者の活動を、ミツバチ経済やトマト植物経済として経済活動とみなし、人の経済と相互作用しつつ、それぞれの生計を成り立たせていると想像することを可能にする。先に引用したマクマホンも、食べ物を消費することは、それを宿した社会経済関係を消費することであるという彼女の議論のなかに、生態としての経済、経済としての生態というこの相互依存的な理解を埋め込んでいる。

労働を前節からの赤い糸として続けると、これらのマルチスピーシー・エコノミーズはマルクスの死んだ労働 (dead labour) と生きた労働 (living labour) という理解を通して認識することができる (Marx, 1993)。マルクスは、人と人以上の労働の一連の連なりが、物事におこる変容に埋め込まれていると考えた。マルクスにとって、農作物とは、死んだ労働と生きた労働の連なりの結果である。死んだ労働は、例えば、生きた労働を行う農民が作物を作るために使う道具をつくった労働者によって行われた労働である。農民の生きた労働は、その労働が行われるとすぐに、その作物に埋め込まれ死んだ労働になる。この視角からは、作物は、継承者が前任者の死んだ労働を自分たちの生きた労働の中に包みこみ、その貢献の連なりを通して作り出されている。対して、人間中心主義の視角からは、農作物は、例えば土、種、道具、そして書類仕事を変容させた人によって行われた労働の体現化である。この死んだ労働と生きた労働という概念は、

関係的存在論を基盤とするという意味で、トロント(2013)のケアをお互いに幾重にも重ね合うものとして捉える見方と共鳴する。マルチスピーシーズの視角からは地球上他者たち(例えば微生物、藻類、ミツバチ、人の微生物叢)は、お互いを重ね合う動力の一部である(Driessen, 2024; Miller, 2020; Puig de la Bellacasa, 2017を参照)。この見方は、お互いを重ね合うマルチスピーシーズ・エコノミーズの継続する相互変容を私達に示唆する。

本節のここまでの議論は、地球上他者たちが労働を行うものと認識されるマルチスピーシーズの生計の生産(production of livelihoods)に焦点をあててきた。これらの労働がすぐにケアと認識されはしないかもしれないが、私達の世界を維持し、継続させ、修復するために不可欠である。例えば広島と長崎(原子爆弾)、水俣と豊島(不法投棄)、福島(放射性物質漏れ)によって何度も示されているように、人だけでは私達の生命世界を修復することができない。私達の世界は、マルチスピーシーズ・ケアを必要としている。異なる種によって行われるケア労働が広く行き渡り、多様な形態をとり、多様な時間枠でおこっているにもかかわらず、私達の極めて人間的な分析では最も見過ごされがちである。人の労働力の搾取にとどまらず、工業的農業はしばしば土壌、植物、昆虫、動物に著しい負担をかけている。政治経済学を研究するフェミニストである私達は、女性とマイノリティ化された人びとの無償労働と低くしか評価されていない労働について、繰り返し議論してきた。この同じ見落としが、その労働と経済が相互作用して私達の福利を生み出している地球上の無数の他者によって行われている強制された無償労働を分析する目を曇らせている。

私達が地球上他者の担う力と労働、そして満たされていないニーズを認識することができ、その認識に基づいてかれらのニーズに対処しようとしたとしても、歴史的に発展した権力関係が人と自然の相互関係を形成している。フェミニスト政治経済学者は、交差性が、より公正でケアする経済をめざす議論の土台を提供するようなかたちで、人の世界のなかの階層的な異種混交性を見えるようにすることを論じてきた。これと同じ構成概念が、私達の分析の視野を地球上他者にまで広げるときに使えるかもしれない。人と人以上の生命世界の結合に注意し、フェミニスト政治生態学とポスト・ヒューマニストの手法は交差性を再考する方法を提供している。フェミニスト政治生態学の交差性は、定義からして、人以上の側面も考慮する。この交差性は、フェミニスト政治生態学が栄える学際的な地理学に由来する生態的な担い手、空間、場所しばしば異なる尺度を含む社会的差異が生態的な状況といかに交差するのかに注目する。例えば、ミレニアム・ビレッジ・プロジェクト(MVP)が試験的に実施されたあるケニアの村では、

生態的な担い手（例えばハイブリッド種、農業儀式に用いられる生態学的な素材、季節性や変化する地域の気候）や社会的差異（例えばジェンダー、複婚制の世帯における社会地位、富、MVP のトレーニングと生計戦略がもたらした知識）は交差しながら、世帯内、および世帯間の食料安全保障をかたちづくっていた (Kimanthi et al., 2022)。ポスト・ヒューマニストの交差性は、常に私達自身の人間中心的な視角を省みるよう要求する。ポスト・ヒューマニストの視角からは、プライグ・デ・ラ・ペラカーサ (2017) の土壌ケアに関する研究が彷彿させるように、種によって異なる時間尺度があることを省みる。また、人ではない種たちの二項対立ではないセクシュアリティに影響を受けたポスト・ヒューマニスト・クィア・エコロジーの視角 (Sandilands & Erickson, 2010) は、私達はいかに他の種の性が生の行路 (life course) のなかで変化するか、もしくは環境との相互作用によって特定の場所で変化するかを示す (福永、2025、本号所収)。ポスト・ヒューマニストのマルチスピーシーズ視角は人間中心の測定や判断を押し付けることを控えるよう私たちに注意を促す。このような省察性なしには、私達は地球上他者たちの貢献と担う力を無視し、このように見落とすことによって地球上他者たちを狭く功利主義的に客体化し、かれらの、そして最終的には私達自身の、死の危険がある無神経な搾取を行う条件を提供する危険性がある。

ケアリング・エコノミーズは、男性と女性、資本主義と非資本主義、主人と奴隷、人と自然のように連結する階層的な権力関係を維持し継続させるべきではない。これまでのところ、私が提案する戦略は、フェミニスト政治経済学の研究者にはすでになじみのある、労働と交差性に関連する分析方法を用いて、人と環境の結合をより詳しく見ることに焦点を当てた。2024年の日本フェミニスト経済学会共通論題の趣旨に見ることができるように、人新世の地質学的な画期は、人が引き起こした気候変動も含め、人類が地球の生態系に重大な影響を与え始めた時代と考えられている。日本のマルクス主義環境哲学者である斎藤幸平 (2023) も、この概念に批判的に取り組んでいるため、すでに日本のフェミニスト政治経済学者にもこの問題は馴染みがあるかもしれない。さらに、ジェイソン・ムーア (2016) も、人新世の概念化における分離不可能な人間活動の問題について指摘している。彼らは、すべての人が平等に生態系に対する否定的な影響をつくりだしたわけではないという事実を人新世が見えなくしていることを指摘した。異なる影響に焦点を当てるために、人類学者のアナ・チンとフェミニスト科学技術論学者のダナ・ハラウェイは、人、植物、動物の強制的移動とグローバル資本主義と人種差別を通して、生態系を損なう大規模農園が導入されたことの交差的な効果を含む、植民地化によってもたらされた差異化の過程に批判的な注意を向けることを可能にする画期である植民新

世 (Plantationocene) という概念を提案した (Haraway et al., 2016)。ケアリング・エコノミーズは、私達を、国境や地質学的時間を超えて歴史的に形成されてきた主人と奴隷、人と自然、そして人種的な階層的権力の動態の再生産への批判を継続させる植民新世の環境問題との関連で政治経済を考えることを含む。この考え方は、分析をジェンダーと資本主義の交差的な影響だけを分析に取り入れることを私達を促すものではない。この考え方は、植民地土地改革や、人と他種を奴隷化し搾取する単一栽培、人種差別、採取主義、汚染と病気のような植民地主義の影響との関係のなかに私達の分析を置くよう、真剣に問いかけている。重要なのは、この考え方は私達が植民地主義から相続した私達自身の成立、特権と不利益を説明するよう求めていることである。

私は、私達の無関心また部分的には人新世の気候変動によってひきおこされた長期にわたる夏の酷暑によって、だれが被害を被っているかを冒頭で尋ねた。都会に住み、エアコンの効いた生活を楽しめる特権を享受している人びと。この快適さは日本のアイス、琉球、朝鮮の領域とその他への過去と現在の植民地主義と分離されたものではない。植民新世において環境問題との関係で政治・経済を考えることは、日本の植民地主義と私達日常生活との接続を考えることを私達に学ばせる。例えば、植民地拡大の歴史、エネルギー、食料安全保障と国家安全保障、大規模農園の拡大、肥料と火薬の生産、チッソ、水俣と同様の韓国の興南病、プラスチック消費の拡大、米軍の存在、原子力発電所、アイスや琉球の人びとの商品化、私達の一部が享受している大量消費生活といった普段は不可視化されている点と点を結びつけてみる。但し、この修練はケアとともになされなければならない。石原 (2024) の、直接水俣を訪れる前に水俣病に苦しむ人びとに対して彼女がどのように考えていたかに関する省察的な分析は、重要な洞察を提供している。この分析的修練を認識論的に行うだけでは、特権を享受する学者たちは痛みのなかにある身体、種族や場所の経験を見ないままである。特権を享受する学者たちに身体化された痛みやさらには死の経験が見えていないことは、これらの痛みに耐えるものたちの感情的そして環境的代価や死を伴う無償労働やケアを、十分に配慮しないことが可能になる。

石原の洞察は、このような分析修練を認識論的に行うだけでは主人と奴隷の階層的権力動態を崩壊させることはできないだろうと考えるカメルーンの歴史学者であり政治理論家であるアシル・ムベンベとも共鳴する。『ネクロポリティクス』(2019)において、ムベンベは、主人と奴隷の階層的権力動態を崩壊させる戦略を、主人と奴隷の階層的権力動態を支配する側も、それに従属する側も、双方が「脆弱性を認識し、受け入れること、もしくはさらに、生きるということはいつも死ぬことも含む、さらされて生きるという

ことであると受け入れること」であると論じている (p.176)。ムベンベにとって、「退化と患いにさらされる身体の脆弱性とともに始まる」(p.175) 脆弱性への相互認識は、人間性にとって必要不可欠な倫理的条件である。マルチスピーシーズ視角では、地球上他者は奴隷の従属する地位と共有しえるものと捉えられることもある。地球上他者たちが人とこの相互の真っ向勝負に挑むことはないにしろ、石原やムベンベ、パルムウツの洞察は、特権を享受する学者たちに痛みや死にさらされる身体、種族、場所の経験に影響を受けることができるようになる主体を培うことを促す。

植民新世に政治経済学を位置づけることは、特権化された快適な生活は植民地主義の結果と関係のある「豊かな地区」にいる多様な人たちによって異なって経験されていることを可視化する。特権化された快適な生活と、社会的環境的損害が不公平に多く経験される「犠牲地区」を含む場所にいる人や他種とその生命世界が被っている社会的、感情的、環境的代価との関係性を可視化するよう動機付ける (Ishihara, 2020; Juskus, 2023)。私達の視角を人間中心主義経済からマルチスピーシーズ・エコノミーズに移行することは、過去と現在の植民地主義が人種差別と人間中心主義を通して、絡み合う階層的關係を維持し継続させているという認識を持つこととともになされる必要がある。

結論にかえて

本稿で私は、私達フェミニスト政治経済学者の視角を移行させる2つの戦略、1) 資本中心主義経済からダイバース・エコノミーズへ、と 2) 人間中心主義経済からマルチスピーシーズ・エコノミーズへ、を提案した。これらは、私達と私達を育む関係者、もの、場所とのつながりに好奇心をもち探索することを可能にする倫理的主体を培い、すでに発展させてきた分析技術一式に基づいて私達の分析を通して、お互いの生存に関心を向ける経済を可能にするためである。トロントのケアの概念化をフェミニスト政治生態学やポスト・ヒューマニスト、脱植民地化の思想とともに考えると、「共にケアすること」とは人や人以上の関係者との間の異なるケアの実践（つまり、配慮し、気遣い、ケアを提供し、ケアを受け取ること）を通して、歴史的に形成された権力動態のなかで行われる複数性、コミュニケーション、信頼、尊重、そして連帯の倫理的な質を確保することであると気づく (Tronto, 2013)。本論をしめくくるにあたり、私は「共にケアする」(caring with) ことを実践する主体をより善く培うために考慮すべき3つの関連する考えを共有したい。

まず、商品フェティシズム (commodity fetishism) に支えられる特権がもたらす自らの立場性と死角について熟考し続けることを提案する。私見では、先述した石原やパルムウツは、「共にケアする」ことを実践し、私達に明確な警告を与えている。石原やパ

ルムウッドは、私達に、自分たちの実践が、他者たち（地球上他者、アイヌや水俣の人たち）を私達のニーズに基づいて粹組みし、他者に対するイメージを投影させているのではないかを問う省察的な主体を発展させることを求めている。かれらが懸念しているのは、特権階級が自分たちの利益のために作り出した他者の表象である。この点は米国を基盤とする黒人フェミニストであるベル・フックス（1992）によって「他者を食べる」（Eating the Other）としてうまく表現されている。「他者を食べる」とは、無責任な表象の実践が、私達を利する植民地主義や人種差別のように、他者が相続した不平等な過程を認識することなく、他者を商品化し称揚することである。気配りにかける階層的な社会経済関係をつくりだすような、問題のあるしばしば認識されない表象の実践をしないために、パルムウッドは、私達が他者の「ニーズ、目的、そして動機」を知り、尊重するよう学ぶことを提案している。他者とは、マイノリティ化された人びとや、地球上他者たちである。そうすることによって、石原やムベンベは、私達に他者の痛みや死と、同時に私達自身の脆弱性を認識し、主人と奴隷の関係やその他の階層的権力動態を再生産しないよう求めている。私達フェミニストはいかに家父長制と資本主義が男性と女性に対し異なった影響を与えるか、分析のなかだけでなく、私達自身の現実において見つめることを学んできた。石原やムベンベの洞察は、植民地主義や人種差別、私達の決定が与える環境代価を他者に負わせることによって形成されてきた私達自身を省察することを学ぶよう、視線を私達自身へ向かせる。私たち自身にも影響を及ぼしている問題であることを批判的に認識し、その認識とともに、私たちが加担していることを公に認めることで生じる私達自身の脆弱性を受け入れることで、相互的な関わりを生み出し始める条件が整うのである。

第二に、他者と私達自身の身体化された経験を認識するためには、影響を受けることを学べるよう、私達の感覚を養う必要がある。認知や知識のみに焦点を当て続けていると、他者の身体化された苦しみを見失うおそれがあり、私達の感情を研究する時に脇にのけておきがちである。マルチスピーシーズ・ケアと相互依存を想像することを学ぶ主体を培う私の個人的な戦略は、種と種、そして種と人間の相互作用についてのオープンで好奇心旺盛な観察以外では、例えば読書（非学術書や子供用の本も含む）、対話やワークショップ参加、映画や動画鑑賞、ポッドキャスト拝聴、デモ参加、美術館訪問、ガイドツアー参加、マイノリティ化された人々や人以上の種たちと密接に関わって働いている人々との非公式な会話である。レイチェル・カーソンの『沈黙の春』（2002）は殺虫剤の人間および生命世界への有害な影響について私達に警告している。そしてロビン・ウォール・キマラーの『植物と叡智の守り人』（2013）は、地球上他者たちの豊富な贈与

経済を、先住民の視点から描き出している。私達は、例えば石牟礼道子の『苦海浄土』(1972)、有吉佐和子の『複合汚染』(2014)、上橋菜穂子の小説『香君』(2022)、畠山重篤による子どもの本『かきじいさんとしげぼう』(2005)を通して、マルチスピーシーズの相互依存とケアを認識することを学ぶ身体的感覚の向上の方法を模索できるだろう。繰り返すが、私達の、影響を受けることを培うこの訓練は、省察性を伴わなければならない。石原(2024)は、水俣を訪れる前に『苦海浄土』を読むなどの予習をした後でさえ、まだ自分には死角があることを認識したという。石原は他者のもとを訪れ、他者を表象しようとするものは、自らがいかに他者たちの視線が私達を捉え返すのかを認識するよう訓練し、緊張感を持ち続けるよう提案している。この認識を実践すること、ムベンベとともに考えることは、私達自身の脆弱性を認識し私達の弱さを他者との互惠のもとにさらすことを学ぶ方法かもしれない。

最後に、ハラウェイや石原のような研究者と共鳴し、私も異なる物語を語ることを学ぼう提案する。異なる物語とは、内容が異なる(身体化されたライフストーリーと目に見えない点と点をつなぐ分析の組み合わせ)だけでなく、異なる方法論を必要とする。日本フェミニスト経済学会の大会の1週間弱前、私は1日水俣を訪れた。水俣病資料館のガイドツアーに参加し、食べることから水俣病を考える、京都大学の農業史・環境史学者である藤原辰史と、地元の水俣病に関する語り部である吉永理巳子のトークイベント「食べるからみる水俣病」に出席した。藤原によってうまく描写された、水俣病と化学肥料、植民地主義、戦争とその他の歴史的かつ国際的なつながりに、私の思考は刺激を受けた。他方で、吉永の生きたライフストーリーは、海面に反射する太陽の輝きを思い浮かべながら、子どもが浜辺で遊ぶ喜びや季節によって海からもたらされたものを食べる喜びについて、そして汚染されたヘドロに覆われた埋立地によって海の匂いが失われたことが彼女の愛する家族や集落の人びと、そして地球上他者たちに与えた影響についての私の身体化された想像力をかきたてた。本を読んで学んだことに加えて、水俣を訪れ、異なった話を聞いたことが合わさって、私のケアリング・エコノミーズを現実にするための動機はより高まった。異なる話を伝えることを学ぶためには、異なる方法論が必要である。例えば、学術的な知識を特権化せず、経験を通した視角に価値をおくような、学際的(transdisciplinary)なフォーラムや対話を考えるのもよいかもしれない。異なる話題を違う話法でもの語ることを学び、学際的な対話を探求することは、学者、在野の研究者、そして地球上他者たちとの複合的共同体を育成する、経済的な可能性に好奇心をもったり実験してみようとする主体が必要である(Cameron et al., 2014)。

日本の特権を享受するフェミニスト政治経済学者のなかでノイズをならそうとする人び

とに加わり、私は資本中心主義経済からダイバーズ・エコノミーズへ、そして人間中心主義経済からマルチスピーシーズ・エコノミーズへと私達の視角を移行させる2つの分析的戦略を提案した。これらは省察性、私達自身と他者、双方の脆弱性に影響を受けることを学ぶこと、そして異なる物語を異なる方法でもの語ることを学ぶことを伴う。私は、経済をよりケアするもの、より人と地球上他者によって提供されているが不可視化されているケアに、私達すべてがそれに頼っているケア、私達すべてがそれによって構成されている相互依存の網の目により注意深いものにするために働こうとする主体を促すためにそのようにしたのである。私が提案したものは、あり得る可能な分析的戦略をすべて使用果たすようなものではまったくない。それらは、私達が共に探求すべき方向性を示すものである。好奇心のメガネをかけながら、それらを採用することは、継続的かつ省察的に経済の違いを読み取ることができるようにし、私達の経済をよりケアするように私達を促すであろう。

【謝辞】

本稿は、2024年8月に東京で開催された「フェミニスト経済学とエコロジー」と題された日本フェミニスト経済学会の共通論題での報告に基づく。共通論題のオーガナイザーである大橋史恵と岩島史、編集のサポートをしてくれた小ヶ谷千穂、そしてピーター・タマスに謝辞を述べる。特に共通論題での報告の場を作る橋渡した翻訳を担当してくれた岩島史には心より感謝する。

【脚注】

- (1) ポスト資本主義視角の「ポスト」とは、資本主義の「後」のように時間性を指すものではない。資本中心主義への対抗であり、資本主義もダイバーズ・エコノミーズのうちの一つであると捉える。
- (2) マルクス主義理論では、非生産労働とは剰余を生み出さない労働のことである。例えば世帯の資源の出入りを管理するために世帯員が行った労働は、いかにその管理が生産労働の存在条件を提供するものであったとしても、剰余を生み出さない。この労働は新たな剰余を生み出さないが、世帯の関係性を維持し、継続させ、修復するために必要な条件である。マルクス主義の視角からは、生産労働と非生産労働は相互依存的であると認識される。生産労働と非生産労働は互いの必要条件を提供する。そのため、(少なくとも理論上は)、両者は上下関係にはない。

【引用文献】

- Agency for Natural Resources and Energy (ANRE) (2022). *Reiwa4nendo enerugi-shōhi-tōkei-kekka-gaiyō*. Ministry of Economy, Trade and Industry. Retrieved January 27, 2025, from https://www.enecho.meti.go.jp/statistics/energy_consumption/ec001/pdf/ec001_2022.pdf. (経済産業省資源エネルギー庁 (2022)「令和4年度エネルギー消費統計結果概要」経済産業省資源エネルギー庁)
- Ariyoshi, S. (2014). *Fukugōosen*. Tokyo: Shinchōsha. (Original work published 1979). (有吉佐和子 (2014)『複合汚染』新潮社)
- Barca, S. (2019). The labor (s) of degrowth. *Capitalism Nature Socialism*, 30 (2), 207-216.
- Barca, S., Di Chiro, G., Harcourt, W., Iengo, I., Kotsila, P., Kulkarni, S., Leonardelli, I. &

- Sato, C. (2023). Caring communities for radical change: What can feminist political ecology bring to degrowth?. In *Contours of feminist political ecology* (pp.177-206). Cham: Springer International Publishing.
- Cameron, J. (1996). Throwing a dishcloth into the works: Troubling theories of domestic labor. *Rethinking Marxism*, 9 (2), 24-44.
- Cameron, J., Gibson, K., & Hill, A. (2014). Cultivating hybrid collectives: Research methods for enacting community food economies in Australia and the Philippines. *Local Environment*, 19 (1), 118-132.
- Carlson, R. (2002). *Silent spring*. Mariner Books edition. New York, NY: Houghton Mifflin. (Original work published 1962).
- Driessen, C. P. G. (2024, Dec). Bumblebees and the Remaking of Tomato Worlds. *Wild Paper* No. 17. FHNW University of Applied Sciences and Arts Northwestern Switzerland. https://wildpapers.ch/wp-content/uploads/2024/12/WildPapers_17_ClemensDriessen.pdf.
- Fisher, B. & Tronto, J. C. (1990). Toward a feminist theory of caring. In E. Abel, & M. Nelson (Eds.). *Circles of Care* (pp.36-54). Albany, NY: SUNY Press.
- Fukunaga, M. (2025). Awaimonokara miru sekai: Sakana to Feminizumu no kōsasurutorokoro. *Keizaishakai to Jendā*, issue 10, 91-103 (福永真弓 (2025) 「あわいものから見る世界：魚とフェミニズムの交差するところ」『経済社会とジェンダー』第10巻、91-103)
- Gibson-Graham, J. K. (2006). *Postcapitalist politics*. Minneapolis, MN: University of Minnesota Press.
- Gibson-Graham, J. K., Cameron, J., & Healy, S. (2013). *Take back the economy: An ethical guide for transforming our communities*. Minneapolis, MN: University of Minnesota Press.
- Gibson-Graham, J. K. & Miller, E. (2015). Economy as ecological livelihood. In K. Gibson, D. B. Rose & R. Fincher (Eds.). *Manifesto for Living in the Anthropocene* (pp.7-16). Punctum Books.
- Gibson-Graham, J. K., Resnick, S. A., & Wolff, R. D. (Eds.). (2000). *Class and its others*. Minneapolis, MN: University of Minnesota Press.
- Gibson-Graham, J. K., Resnick, S., & Wolff, R. (Eds.). (2001). *Re/presenting class: Essays in postmodern Marxism*. Durham, NC: Duke University Press.
- Haraway, D., Ishikawa, N., Gilbert, S. F., Olwig, K., Tsing, A. L., & Bubandt, N. (2016). Anthropologists are talking-about the Anthropocene. *Ethnos*, 81 (3), 535-564.
- Hatakeyama, S. (2005). *Kakijisan to Shigebō* (H. Tokuda, Illus.). Tokyo: Kōdansha. (畠山重篤 (2005) 『かきじいさんとしげぼう』講談社)
- hooks, b. (1992). *Black looks: Race and representation*. Boston, MA: South End Press.
- Ishihara, M. (2024). Shisōteki-shōhi to manazashi-no bōryoku. In M. Ishihara & Y. Murakami. (Eds.). *Ainu-ga-manazasu: Itami-no-koe wo kikutoki* (p.680-735). Tokyo: Iwanamishoten. (石原真衣 (2024) 「思想的消費とまなざしの暴力」石原真衣・村上靖彦編『アイヌがまなざす：痛みを聴くとき』岩波書店)
- Ishihara, M. & Shimoji, Y. L. (2022). Intāsekushonaruna “noizu” wo narasu-tameni. *Gen-daishiso* (May), 8-37. Tokyo: Seidosha. (石原真衣、下地ローレンス吉孝 (2022) 「インターセクショナルな「ノイズ」を鳴らすために」『現代思想』2022年5月号、8-37)

- Ishimure, M. (1972). *Kugaijōdo*. Tokyo: Kodansha. (Original work published 1969). (石牟礼道子 (1972) 『苦海浄土』 講談社)
- Ishiyama, N. (2020). “*Giseikuiki*” *no America: Kakukaihatsu to senjū-minzoku*. Tokyo: Iwanami Shoten. (石山徳子 (2020) 『「犠牲区域」のアメリカ：核開発と先住民族』 岩波書店)
- Juskus, R. (2023). Sacrifice zones: A genealogy and analysis of an environmental justice concept. *Environmental Humanities*, 15 (1), 3-24.
- Kimanthi, H., Hebinck, P., & Sato, C. (2022). Exploring gender and intersectionality from an assemblage perspective in food crop cultivation: A case of the Millennium Villages Project implementation site in western Kenya. *World Development* (159), 106052.
- Kimmerer, R. W. (2013). *Braiding sweetgrass: Indigenous wisdom, scientific knowledge and the teachings of plants*. Minneapolis, MN: Milkweed Editions.
- Marx, K. (with Simon, L. H.). (1994). Critique of the Gotha Programme. In L. H. Simon (Ed.), *Marx: Selected Writings* (pp.315-332). Indianapolis & Cambridge: Hackett.
- Marx, K. (with Mandel, E.) (1992). *Capital: A critique of political economy, volume 1* (B. Fowkes, Trans.). New York & London: Penguin Books. (Original work published 1867).
- Marx, K. (with Nicolaus, M.). (1993). *Grundrisse: Foundations of the critique of political economy* (M. Nicolaus, Trans.). New York & London: Penguin Books. (Original work published 1939).
- McMahon, M. (2002). Resisting globalization: Women organic farmers and local food systems. *Canadian Woman Studies/Les Cahiers De La Femme*, 21 (4), 203-206.
- Miller, E. (2020). More-than-human agency: From the human economy to ecological livelihoods. In J. K. Gibson-Graham & K. Dombroski (Eds.). *The handbook of diverse economies* (pp.402-410). Cheltenham: Edward Elgar.
- Ministry of Agriculture, Forestry and Fisheries (MAFF) (2022). *Shitteru? Nihon-no-shokujijō 2022: Shokuryō-jikyūristu, shokuryō-jikyūryoku to shokuryō-anzenhoshō*. Retrieved January 27, 2025, from https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/zikyu_ritu/attach/pdf/panful-12.pdf. (農林水産省 (2022) 『知ってる？ 日本の食料事情：食料自給率・食料自給力と食料安全保障』)
- Ministry of Agriculture, Forestry and Fisheries (MAFF) (2023). *Reiwa5nendo shokuryō-jikyūritsu-ni-tsuite*. Retrieved January 27, 2025, from https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/zikyu_ritu/attach/pdf/012-9.pdf. (農林水産省 (2023) 『令和5年度 食料自給率について』)
- Moore, J. W. (Ed.). (2016). *Anthropocene or capitalocene?: Nature, history, and the crisis of capitalism*. Oakland, CA: Pm Press.
- Nakamura, N., & Sato, C. (2023). More-than-human commoning through women's kokorozashi business for collective well-being: A case from aging and depopulating rural Japan. *International Journal of the Commons*, 17 (1), 125-140.
- Plumwood, V. Shadow places and the politics of dwelling. *Australian Humanities Review* 44 (2008) : 1-9. Retrieved January 27, 2025, from <https://australianhumanitiesreview.org/2008/03/01/shadow-places-and-the-politics-of-dwelling/>.
- Puig de la Bellacasa, M. (2017). *Matters of care: Speculative ethics in more than human worlds*. Minneapolis, MN: University of Minnesota Press.
- Resnick, S. A., & Wolff, R. D. (1989). *Knowledge and class: A Marxian critique of political economy*. Chicago, IL: University of Chicago Press.

- Roelvink, G., & Gibson-Graham, J. K. (2009). A postcapitalist politics of dwelling: Ecological humanities and community economies in conversation. *Australian Humanities Review*, 46, 145-158.
- Saito, K. (2023). *Marx in the Anthropocene: Towards the idea of degrowth communism*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sandilands, C., & Erickson, B. (2010). *Queer ecologies: Sex, nature, politics, desire*. Bloomington, IN: Indiana University Press.
- Sato, C., & Soto Alarcón, J. M. (2019). Toward a postcapitalist feminist political ecology's approach to the commons and commoning. *International Journal of the Commons* 13 (1), 36-61.
- Sedgwick, E. K. (1993). *Tendencies*. Durham, NC: Duke University Press.
- Tronto, J. (1993). *Moral boundaries: A political argument for an ethic of care*. London: Routledge.
- Tronto, J. C. (2013). *Caring democracy: Markets, equality, and justice*. New York: New York University Press.
- Tronto, J. C. (2024). *Kearingu demokuras: Shijō, byōdo, seigi* (Y. Okano, N. Sōma, N. Ikeda, K. Tomioka, & K. Tsushima, Trans.). (Original work published 2013). (トロント、C. ジョアン (2024) 岡野八代監訳『ケアリング・デモクラシー——市場、平等、正義』勁草書房)
- Uehashi, N. (2022). *Kōkun*. Tokyo: Bungeishunjū. (上橋菜穂子 (2022) 『香君』文藝春秋)
- van der Veen, M. (2001). Rethinking commodification and prostitution: An effort at peace-making in the battles over prostitution. *Rethinking Marxism*, 13 (2), 30-51.